

## 義太夫節浄瑠璃本における山本版に対する他版の抵抗

横山, 正  
大阪教育大学名誉教授

<https://doi.org/10.15017/11926>

---

出版情報 : 語文研究. 68, pp.41-50, 1989-12-15. 九州大学国語国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

# 義太夫節浄瑠璃本における山本版に対する他版の抵抗

横 山 正

義太夫節の素人向きの稽古本（俗に言う丸本）は古くより山本九兵衛・同九右衛門版などの書肆山本両家の出版になるものが最良と考えられた。また丸本の奥書にもそれを主張していることは周知の事実である。近松作品に関しては、これは認められてよいと考えられる。しかしそれ以外の浄瑠璃の場合、必ずしもこのことは常に是認されるとは言いえないのではなからうか。

いまここに、同じ題材を浄瑠璃（義太夫節）化した二つの作品を採り上げて吟味してみたいと思う。

『那須与一小桜威』（竹本筑後掾正本・八行二十九丁・半紙本・山本九兵衛版）（この左側に山本九右衛門版とあったらしい空白があるが破損）・第九丁目が一丁補写（早稲田大学演劇博物館本）

『那須与市小桜威并船遺恨』（竹本筑後掾正本・八行三十二丁・献上本・本屋仁兵衛版）（架蔵本）

この二本については、かつて『語文』（大阪大学国文学研究室編輯）第三十二輯に「筑後掾本『那須与市小桜威』の浄瑠璃史的意義」の題名で書いたことがあるが、その時は浄瑠璃本文に付けられてい

る文字譜については殆んど触れなかった。しかし音曲である浄瑠璃本文を論ずる場合、胡麻点はともかくとしても、文字譜には少なくとも一応注目しなければ、浄瑠璃本文の比較研究には不完全と言わざるをえないであろう。従って今回は文字譜（句点も節符の一種とみて加える）をも併せて二作品を考察することによって『那須与一小桜威』と『那須与市小桜威并船遺恨』とが持つ意義の相違を究明しようとするものである。

次にこの両作品の同文または酷似の部分（文章が異なれば当然節付も変化の可能性が出るので）に付けられている文字譜の全部を上対照の形式により掲げる。ただし本人の仮名と漢字との違い、濁点の有無の違い、表記形式の違い（例えば与・市と与・一、片仮名と平仮名との相違、仮名遣いの相違などは同文とみる。

〔表一〕

		那須与一小桜威		那須与市小桜威 <small>并</small> 船遺恨	
1	丁	1	丁	1	丁
オ	オ・ウ	ウ	オ・ウ	ウ	オ・ウ
6	行	1	行	1	行
おはしけり		おはしけり		おはしけり	
山本版		仁兵衛版			

4	4	4	4	4	4	4	3	3	3	2	2	2	2	2	1	1	1	1
ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	ウ	ウ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	ウ	ウ	ウ	オ
4	2	2	2	8	3	1	2	1	7	7	5	3	2	1	8	6	2	6
かゝるくはんげん	宗高たまりかね	のゝしれば。	一々に	や	はちやのくはんじ	山おろしはげしく	さだ国は	まさごをも。	まくらにかちま	恋を。	花ぞの。	なりにし	水も七たび	ちこは	夫よりもへ嶋廻	迎舟	道ふさとて	然るに
4	4	4	4	4	4	4	3	3	3	3	3	2	2	2	2	2	1	1
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	ウ	ウ
7	5	4	4	2	4	3	4	3	1	2	1	7	7	2	1	6	7	1
かゝるくはうげん	宗高たまりかね	のゝしれば。	色一々に	くはんじや	山おろしはげしく	さだ国は。	まさごをも	枕にかちまくら。	恋を	さくら	花ぞの	成にし	水もなゝたび	ちこは	それよりも御しま	むかひぶね	道房とて。	しかるに

7	7	7	7	7	7	7	6	6	6	6	6	6	6	6	6	5	5	5	5	4			
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	オ	オ	ウ			
5	4	4	4	1	5	2	1	8	7	5	2	2	8	7	7	1	1	3	6	4	2	8	
ゑちこの国	召上て	どうじ給ひ	候へば	しこうせしが	申上る	ないだんし。	下り	かちどき	しよせん	にげて行	さきに	大かりまた	たせい	たせいが中へ。	さしかざし	さだ国成か	宗高聞召。	よばゝれば	今や、くど。	こぎもどせば	御ほんい	大ひやう	小兵
8	8	8	8	8	7	7	7	7	7	7	7	6	6	6	6	6	6	5	5	5	5	5	5
オ	オ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ
7	6	5	4	2	6	2	1	8	7	5	1	1	7	6	6	7	7	6	8	1	8	5	2
ゑちこの国	召上て。	どうじ給ひ。	候へば。	しこうせしが。	申上る。	ないだんし	下り。	かちどき	しよせん	にげてゆく。	さきに	大かりまた	たせい	たせいが中へ	さしかざし。	さだ国成か。	宗高聞召	よばゝれば。	今や、くど。	こぎもどせば	御ほんい	大ひやう。	小ひやう

8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	7	7	7	7					
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ					
6	5	5	5	4	4	4	3	3	3	3	2	2	2	1	6	5	2	8	7	6	6	
北の御かた	ある時北の御かた	あかさせ給ひ	父にて。	然も	五つ月の。	またたい内	宗高	か	う	川中嶋に	任せしな	道ふさが	世のせい	泣々わか	次第かな	涙を	はちやめ	宗高は	今や	はかる	上意	
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	8	8	8	8	8	
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ
4	4	4	3	3	2	2	1	1	1	8	8	8	7	6	3	1	4	2	2	8	8	
北の御かた	有時北の御かた	あかさせ給ひ	父にて。	しかも	五月の。	またたい内	宗高	か	う	川中嶋に	国	道房が	世のせい	泣々わか	次第かな	涙を	はちやめ	宗高は	今や	はかる	上る	

11	11	11	11	11	11	10	10	10	10	10	10	9	9	9	9	9	9	9	9	8	8
オ	オ	オ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	ウ	ウ
8	7	6	6	6	6	8	1	8	6	5	8	8	6	5	3	7	7	7	6	6	6
夜はまだふかく	身は	すがたぞ	かうくの	ひろはせ給ふ。	たゞこれなるは	もだへ。こがれて	へ共。	おめきさけばせ給	な。	ゆゝしき我子や	見送りて	扱下かう	心静に	北の方と姫君も	諸事のあはれ	きもたましるも	あらうらめしの	とある所に	いそがるゝ	ゆめを見る	もり岡
12	12	12	12	12	12	12	11	11	11	11	11	11	11	11	10	10	10	10	10	9	9
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ
6	6	5	5	5	5	8	8	6	5	4	6	5	3	8	6	1	1	8	5	5	5
夜はまだふかく	身は	すがたぞ	かうくの	ふ。	ひろはせ。給	只。是なるは	もだへ。こがれて	へ共。	おめきさけばせ給	な。	ゆゝしき我子や	見送りて	扱下向	心しづかに	北のかたも姫君も	諸事のあはれ	きもたましるも	とある所に	急がるゝ。	夢を見る。	森岡

15	15	15	14	14	14	14	14	13	12	12	12	12	12	12	12	12	12	11	11	11		
オ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	
8	1	1	8	7	4	3	4	2	6	3	2	1	8	2	2	2	1	1	7	5	4	
とぶんじ	ひろひ取	こぶんじは。	是は扱置	ひの	ざんしやたいぢの	ざんしやたいぢの	まつひらゆるせ	通らるぞ。	たびのみち	きそのかけはし	ぬれも。	あたのたはふれ	こゝろもなく	心の月は。	みがくとくさも	そのはらや	くらぶまひぞの	思ひには。	恋ゆへたびを	をばすてや	あと見かへりて。	おばな。まねけば

17	16	16	16	16	16	15	15	14	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13
オ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ
1	8	8	8	6	2	8	8	3	7	6	5	4	4	8	7	7	7	6	5	3	2	2
こぶんじ	ひろひ取	こぶんじは	是は扱置。	ぜひの	ざんしやたいぢの	ざんしやたいぢの	ゆるせ	とをらるゝぞ。	たびの道	きそのかけはし	ぬれも。	あたの。たはふれ	心もなく	心の月は。	みがくとくさも	そのはらや。	くらぶまひぞの	思ひには	恋ゆへたびを。	をばすてや。	跡見かへりて。	おばな。まねけば

17	17	17	17	17	17	17	17	17	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	15	15	
ウ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	ウ	
4	8	7	7	6	6	5	5	5	1	8	5	4	3	3	1	7	7	6	5	4	1	5	2
おり給ひ	先宗高殿	こぶんじへ	扱かはらけ	候と	こぶんじ聞召	ゆるし給ふへし	かけ給はん	其ふぜい	みどり子	けなげさよ	君にちう有	いかに千王丸殿。	引たて	かけさせて	しやうぜられ	引つくろひ	去程に。	今や、くゝと	あらためて。	やかたをへさして	ともかくも。	つき	ほり

19	19	19	19	19	19	19	19	19	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	17	17	17	17
ウ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	ウ	オ	オ
3	7	5	5	4	4	3	3	2	6	5	2	1	8	7	5	3	3	2	1	8	6	8	5
おり給ひ。	いや先宗高殿	こぶんじへ。	扱かはらけ	候と。	こぶんじは聞召	ゆるし給ふへし。	かけ給はん	其ふぜい。	みどり子	けなげさよ。	君に忠有	いかに千王丸。	引たて	かけさせて。	しやうぜられ。	引つくろひ。	去程に。	今や、くゝと	あらためて	やかたを。さして	ともかくも。	つき。	いはり

18	18	18	18	18	18	18	18	18	17	
オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	
5	4	4	4	3	3	3	2	1	8	
脚此状上へあげて 某はかまくらの飛	み申さん。 入御ばんのお衆頼	こぶんしのもんに たはらに忍ばせ。	北のかた姫君をか 源内道ふさ。	をか かゝる折からもり	らく ことふきは。しば	らんぶらん酒 つみかさね	は。 一もん家中の人々	とて 國中けふの御祝義	ぢうだいを	
20	20	20	20	20	20	20	20	20	19	
オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	
7	5	5	4	4	3	3	2	1	8	
脚此状上へあげて 某はかまくらより の使也。此状上へ あげてたべ。	ん侍に近付て。 某はかまくらより	にかくしをき。ば た姫君をかたはら	ぶんじ殿のもんせ んにて。先北のか	ごにつきしかばこ し。やうくゝゑち	親子の人々御供 源内道房は	岡 かゝる折から。森	く ことふきはしばら	乱舞乱酒 つみかさね。	なれば 一もんかちうの人	ぢうだいを。 かゝるめでたき折

20	20	20	20	20	20	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	18	18	18		
オ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	ウ	オ
5	4	4	4	3	3	8	8	7	7	7	6	3	3	3	2	1	1	8	7	6	
是ぞおや子の ゆづられしは。	しそんに 中高殿。	かみかきなで、そ 仕れと	なでしこの 人々は誠とか	宗高 おはしませ。	御子とや。	是こそ御身の 中なへくと	うばひ取。	討てすて ケ様くゝの	御しんてい	はらくとながし	いそぎ帰て	預れば	はらばんやがて	たうばんやがて	はらばんやがて	はらばんやがて	はらばんやがて	はらばんやがて	はらばんやがて	はらばんやがて	はらばんやがて
22	22	22	22	22	22	22	22	22	22	22	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	20
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ
2	2	2	1	1	8	5	4	4	4	4	3	7	7	6	6	4	4	3	2	2	8
是ぞ親子の ゆづられしは。	しそんに 中高殿。	かみかきなで、そ 仕れと	なでしこの 人々は誠とか	宗高 おはしませ。	御子とや。	是こそ御身の 中なへくと	うばひ取。	討てすて かやうくゝの	御しんてい	はらくとながし	きつと帰て	あづかれば。	はらばんやがて	はらばんやがて	はらばんやがて	はらばんやがて	はらばんやがて	はらばんやがて	はらばんやがて	はらばんやがて	はらばんやがて

22	22	22	22	22	22	22	22	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	20	20	20	20
ウ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	オ	オ	オ
2	8	8	7	4	2	1	1	8	6	3	2	2	7	7	6	6	4	3	2	8	7	5
よしむら。	先一ばんに	筆取にて	尤とどうしつゝ	出んとや	人々かずをしらず	かぎらず	与世屋一人に	とあれば	しよの為なれば。	今日	使をべ立らるゝ	一々	さるによつて	者はなし。	おしからず。	兄弟とやいはん	五さいの時	夜いくさ	ばんせいらく	存しに。	聞もあへ給はず。	ふかきゑん。
24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	23	23	23	23	23	23	22	22	22	22
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ
8	7	6	6	3	1	8	8	8	5	3	2	1	7	7	6	5	3	2	8	6	5	3
よしむら。	先一ばんに	筆取にて	尤とどうしつゝ	出んとや	人々〳〵数をしらす	かぎらず	与市殿一人に	とあれば	じよのためなれば	今日	使をべ立らるゝ	一々	去によつて	者はなし。	おしからず	兄弟とやいはん	五才の時	よいくさに	ばんせいらく	存しに	聞もあへ給はず	ふかきゑん
24	24	24	24	24	24	24	24	23	23	23	23	23	23	23	22	22	22	22	22	22	22	22
オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ
8	8	7	6	3	7	6	5	3	2	2	8	8	7	6	6	5	4	3	物ならば	五たいに	をさめ	かど出と
んに。	我石橋山のかつせ	るせり。	他のそねみ有とし	んく。	いかにからうのめ	頼朝きこしめし	すぐなからず。	と有	しゆくぐはんのこ	過つる	頼朝は	さゝ木四郎	上らるゝ。	五十三人の	皆かんぜぬ者	おちぬべし	いきほひは	かど出と	をさめ	五たいに	物ならば	しげふさ
27	27	26	26	26	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25
オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ
2	1	8	8	5	8	7	5	4	2	2	8	7	6	5	5	5	3	3	をさめ	五たいに	物ならば	しげふさ
せんに。	我石ばし山のかつ	るせり。	他のそねみ有とし	んく。	いかにからうのめ	頼朝聞召	すぐなからず。	有	しゆくぐはんの事	過つる	頼朝公	さゝきの四郎	上らるゝ。	五十三人の	みなかんぜぬ。も	おちぬべし。	いきほひは	かど出と	をさめ	五たいに	物ならば	しげふさ

25	25		25	25	25	25	25	25	25	25	24	24	24	24	24	24	24	24	24		
ウ	ウ		ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ		
5	4		4	2	2	8	6	6	1	8	4	3	3	3	2	2	1				
さん候	ちばの彦太郎しゃく取なをし。	有か。	したるせうこばし	扱かち原が人の上	ましませと	よくく	七代。	やらん	あづさわするゝと	かな。	わすれさせ給ふ物	あらず共	せんぢん	天下を	頼朝が為には	今とても	ちうをつくす。	たゝかひにも	うち川	命を助け。	
28	28		28	28	28	28	28	28	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	
オ	オ		オ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	
8	8		7	6	5	4	1	8	3	1	6	5	5	4	4	3	3				
さん候	ちばの彦太郎しゃく取なをし。		るか。	せりせうこばしあ	扱梶原がさんげん	ましませと。	よくく	七代	やらん	あつさわするゝと	かな	わすれさせ給ふ物	あらず共。	せんぢん。	天下を	頼朝がためには	今とても	忠をつくす。	たゝかひにも。	うち川	命をたすけ。

28	28	28	28	28	27	27	27	27	27	27	26	26	26	26	26	26			26	26		
オ	オ	オ	オ	オ	ウ	ウ	オ	オ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ		オ	オ		
6	5	4	3	2	7	1	3	1	1	1	7	6	6	5	5	8	4		3	2		
跡にながらへ	一々。せつふく仕	君御たいせつに	おほけれとも。	申付るより外は	わか者共我まゝを	其くび	上意かな	ことのしさい	かち原を召出し。	頼朝聞召	思召かへられ	聞わけられ	申に候はず。	御為を存じ。	成まじきと	るさいなれば	いかにかち原が	し。	さやうにてはなし。	君聞召いやく	げ時を	かほどふだうのか
31	31	31	30	30	30	30	29	29	29	29	29	29	29	29	29	29	28			28	28	
オ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	ウ		ウ	ウ		
4	3	1	8	8	4	7	8	6	6	5	4	3	3	1	1	5	8			8	6	
跡にながらへ	一々。せつふく仕	君たいせつに	をほけれ共	申付るよりほか	若者共が我まゝを	其首	上るかな。	事のしさい	梶原を召出し。	頼朝聞召	思召かへられ。	聞分られ。	申に候はず	御ためを存じ	成まじきと。	るさいなれば。	いかに梶原が		やうにてはなし。	君聞召いやく	げ時を	か程ぶたうのか



29	29	29	29	29	29	29	29	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ
8	7	6	4	1	3	1	5	4	3	3	3	3	1	1	1	8	
けり	中々申計はなかり	さかへ給ふ	はらさるゝ	さういなし	をよぼんと	其時 <small>（ヘル）</small>	さりながら	うらみの矢	さあらば	おおそらく	立のかば	見聞べし。	道理しごくの	先しばらく	扱もく		
32	32	32	32	32	32	32	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	オ	
8	7	6	3	1	2	1	4	3	2	2	1	7	7	7	6		
りけり	中々申。計はなかり	さかへ給ふ。	はらさるゝ。	さういなし。	及ぼんと。	其時 <small>（ヘル）</small>	去ながら	うらみの矢。	さあらば	をそらく	立のかば。	見聞べし。	道理しごくの	先しばらく	扱もく		

二

以上は『那須与一小桜威』（八行、山本版）と『那須与市小桜威并船遺恨』（八行、仁兵衛版）との同文、またはそれに近い部分において、それぞれ使用されている文字譜の全部を調査したものであるが、そこに使用されている文字譜をまとめると次の「表二」のようになる。それぞれの文字譜の下の数字は、それぞれの作品の同文ま

	那須与一小桜威	那須与市小桜威并船遺恨
。 (句点)	67	140
ハル	30	21
ウ	30	19
色	14	8
中	19	14
地	10	17
フシ	9	8
地色	△ 6	△ 6
詞	5	16
地ハル	4	6
ヤクリ (フシヤクリを含む)	6	8
地中	4	2
下	3	1
中ウ	△ 2	△ 2
スヘテ (スエテ)	△ 2	△ 2
本フシ	△ 1	△ 1
三重	1	2
地ウ	1	0
中フシ	1	0
		(トル三重を含む)

たはそれに近い部分に用いられている各種別文字譜（句点も文字譜の一種とみる。二種合成された「ハルフシ」「地中」等々も一種として扱った。）の総数である。

〔表二〕

舞	△	1
セメ	0	1
中地	0	1
ハルフシ	0	3
上	0	2
トル	0	1
トル三重	0	1
キン	0	2
ノル (山本版)	0	1
総数二〇種		総数二六種

右両作品の文字譜使用の特性より、次に挙げる傾向(特性)をうかがうことができる。

(表二)

那須与一小桜威 (山本版)	那須与市小桜威船遺恨 (山本版)
一、多出する文字譜 (ハル・ウ・色・中・地・フシ) の頻度は山本版の方が多し。 110	(1) 比較的少数 (フシの内、一つはノル)。 88
二、地中・下・地ウ・中フシなど山本版の方が多い。 9	(2) これらについても仁兵衛版の方が少ない。 3
三、詞・地ハル・ヲクリでは山本版の方が少ない。 15	(3) 詞・地ハル・ヲクリでは仁兵衛版の方が明らかに多数。 30
四、句点 (。 ) は少ない。 67	(4) 句点も曲譜の一種とみられ、山本版の約二倍。 140

五、舞	1	(5) 舞	1
六、仁兵衛版に見られる中地・ハルフシ・上・トル・トル三重・キン・ノルなどの曲節がすべてない。	0	(6) 中地1。ハルフシ3。上2。トル1。トル三重1。キン2。ノル1。と多彩である。	1
七、セメ	0	(7) セメ	1
八、(フシ) ノルと同所	0	(8) ノル (フシと同所)	1

右の表一・表三を整理要約すれば次のようになる。

(表四)

那須与一小桜威 (山本版)	那須与市小桜威船遺恨 (山本版)
○文字譜総数20種 (句点を含む)	○同上26種 (句点を含む)
○右の内より同種・同数のもの (地色・中ウ・ステテ・本フシ・舞) を除くと15種。	○同上21種。
○同種・同数のものを除き、仁兵衛版よりも多い文字譜。 ハル・ウ・色・中・フシ・地中・下・地ウ・中フシ (九種)	○同種・同数のものを除き、山本版よりも多い文字譜。 句点・地・詞・地ハル・ヲクリ・三重・セメ・中地・ハルフシ・上・トル・トル三重・キン・ノル (十四種)

○右のうち、同一場所で両者異なるもの フシ (一種)	○右のうち、同一場所で両者異なるもの ノル (一種)
----------------------------------	----------------------------------

結び

以上、同じ題材を義太夫節浄瑠璃化した『那須与一小桜威』(山本版)と『那須与市小桜威船遺恨』(本屋仁兵衛版)との二本をそれぞれに付けられた曲節の文字譜の面から比較検討してきた。

その方法としては二本の曲節(文字譜)の異同の比較を中心とするため、右両作品の本文が完全に同文であれば、曲節の相違が一目瞭然であるが、両者の本文に部分的に、いくらかの変化がある限り、異文の部分では両者の曲節にも異同を生ずる可能性が当然考えられるので、ここでは最初に述べたように、両者同文の部分またはそれに近い部分のみの全部を比較の対象とし、そこに付けられている両者の文字譜全部の相違だけを対象としたことは既述の通りである。この上に立っての調査結果が前掲の「表四」である。

まずこの表で知られることは、文字譜(句点を含む)の総数量が山本版よりも仁兵衛版の方において、六種類多いことである。

次にこの両版より、同種同数の文字譜五種(表二の内、数字の上△印を付けたもの)即ち地色・中ウ・スエテ・本フシ・舞を除くと、山本版は十五種、仁兵衛版は二十一種となる。

更に右のように両版から文字譜の同種・同数のものを除いた後の両者の同一文字譜の使用度数の多少を比較すると、山本版の方で、

仁兵衛版よりも使用度数の多い文字譜としては、ハル・ウ・色・中・フシ・地中・下・地ウ・中フシの九種となるのに対して、仁兵衛版の方では、山本版よりも使用度数が多く見られる文字譜が句点・地・詞・地ハル・ヨクリ・三重・セメ・中地・ハルフシ・上・トル・トル三重・キン・ノルの十四種にもおよぶのである。

しかも右の文字譜の各種類は山本版に於てはセメ・中地・ハルフシ・上・トル・トル三重・キン・ノルの計八種が全く使用されていないのに対して、仁兵衛版の方では、これらが使用回数こそ少ないが、すべて使用されているのである(表二参照)。

こゝに山本版とは異なる仁兵衛版の音曲の多彩さと変化とを發揮し、伝統ある山本版の權威に対する曲節上の抵抗の試みと努力とを見ることができるのであり、当時、權威を誇った山本版に対する他版のせめてもの抵抗と努力の一端を垣間見る思いがするのである。

たゞ最後に付記しておきたいことは小論では決して山本版を輕視するものではなく、(表二)の一、二が示しているように、義太夫節における、多出する中心的曲節においては、山本版は数量的にも仁兵衛版を完全に抑さえており、その權威を誇るものであるが、同表の三・(3)以下の各種曲節の多彩な変化では、他版(仁兵衛版)も亦よく山本版に抵抗して幅広い多彩性を發揮していることは輕視できないところであらう。

(一九八九年三月受理)